

四種眼の一考察

金 本 拓 士

(東 洋 大 学)

「慈悲眼」という言葉を聞いて、まず頭に浮かぶのは、観音経偈文に説かれている「慈眼視衆生」であろう。それは、観音菩薩が一切衆生に対する慈悲 (kṛpa-maitra) の眼を有することが示されているからである。そこで「慈悲眼」という言葉を聞くと、即座に観音菩薩の衆生救済のイメージと結びつく。

ところで、この仏菩薩の眼差しである「慈悲眼」は、密教においては、「四種法」の一つである息災法と関連づけられている。

「四種法」とは、息災、増益、鉤召、降伏の四種であり、それぞれの祈願に応じた修法の種類である。この「四種法」それぞれに「四種眼」という概念が組み込まれている。つまり「四種法」のうち、息災法に、四種眼の一つとしての慈悲眼が当てはめられているのである。

本論は、密教における「四種眼」とは何か。そして何故、そこから慈悲眼が息災法と関係するのかを検証するものである。

1. 「四種眼」の典拠

「四種眼」については、次の密教経典の中で見いだされる⁽¹⁾。

* 菩提流志訳『不空罽索神變眞言經』大正20巻1092番274頁上～中

- * 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』大正18巻866番225頁～226頁上
- * 不空訳『金剛頂經瑜伽十八會指歸』大正18巻869番284頁下
- * 不空訳『都部陀羅尼目』大正18巻903番889頁上
- * 施護訳『佛說一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經』大正18巻882番361頁中

これらに記述されているところの四種眼を、表にまとめてみるならば、次のようになる。

不空絹索	慈悲眼 (扇底迦)	金剛眼 (布瑟置迦)	奮目 (攝導)	斜怒瞻視 (旃毘柁魯迦)
畧出經	慈悲眼(除災)	金剛眼(増益)	明目(降伏)	瞋意怒眼(阿毘遮羅)
都部陀羅尼	法眼(敬愛法)	熾盛眼(鈎召)	忿怒眼(降伏 心殺害煩惱)	慈悲眼(除毒息怨敵)
初會金剛頂經	金剛視(妙愛)	光明視(鈎召)	忿怒視(降伏)	慈愛眼(破病毒)
十八會指歸	四種眼(敬愛, 鈎召, 降伏, 息災)			

以上の「四種眼」を見比べてみるならば、大きく分けて二つに分類することができる。

一つは、慈悲眼を最初に持ってくる菩提流志、金剛智の「四種眼」。もう一つは最後に慈悲眼を持ってくる不空と施護によるものである。また、「四種眼」の名称の相違、あるいは「四種法」の名称も相違するものもあるが、概括的にみるならば、どれも似通ったものであるといえる。

これらの經典に共通して説かれるところの「四種眼」ではあるが、「畧出經」「都部陀羅尼」「十八會指歸」が金剛頂經を元に作られたものであり、また「不空絹索」はチベット語訳、あるいはサンスクリット写本には存在せず、漢訳にのみ存在しているところから、どうやら菩提流支が挿入した

ものとするならば、この部分は菩提流支が「金剛頂經」の思想を借りてきたものと考えられる^(補1)。

また、後で見えていくが、この「四種眼」の考え方が現れてくるのは、いわゆる不空訳「三卷本」以降、施護訳で言うところの「金剛秘密曼荼羅廣大儀軌分第二」においてであることから、不空が活躍していた頃、すでに「三卷本」以降の金剛頂經の教えが、たとえ施護訳「三十卷本」のように完成されてなくても、ある程度形成されていたことが考えられる。

2. 「初会金剛頂經」における「四種視」

それでは、以上の諸経論の根拠となっているだろうと思われる、「初会金剛頂經」に、この「四種法」と「四種眼」の関係がどのように説かれているのか。この点について、「初会金剛頂經」の梵本ならびにチベット訳の注釈書、すなわち Ānandagarbha [Āloka], Śyākyamitra [Kosala] そして Buddhaguhya [Avatāra] の三注釈書を参考にしながら確認していくこととする。

また、最初に言っておかなければならないのは、「初会金剛頂經」で四種眼に関係するところの施護訳では、「眼」ではなく「視」となっている。このことについては、後に述べるが、經典の意味内容から見れば、「視」を使用することが適切である。よって、ここからは「四種眼」ではなく「四種視」という表現を使うこととする。

さて、前述したように、初会金剛頂經において、「四種視」が説かれているのは、「三十卷本」の「金剛界曼荼羅廣大儀軌分」中「金剛秘密曼荼羅廣大義旗分第二」に現れ、堀内本で言うなら、「第二章金剛秘密曼荼羅

[堀内 1983：§319～§417] に相当する。

初めに、「四種視」がこの章でどのような位置付けで説かれてくるのかを確認するため、この章内容を概観しておく。

「第二章金剛秘密曼荼羅」は、金剛界曼荼羅で言うところの、三昧耶会に当る。先の章においては、尊形によって金剛界曼荼羅成身会を完成するものであるが、ここでは、金剛界曼荼羅で出現した諸尊が三昧耶形で表される。この三昧耶形とは、如来の心秘密が具現化されたものである。そして、その如来の心秘密とは、陀羅尼で表現される。その陀羅尼を、この秘密曼荼羅では、陀羅尼 (dāraṇī) が女性形の言葉であることから、三昧耶形を持った女尊の姿で表現される。ただし、日本の九会曼荼羅では三昧耶形のみで表現されている。⁽²⁾

本章では、三昧耶曼荼羅を構成する諸尊について説かれた後、続いて阿闍梨が曼荼羅に入る事業が説かれ、次に阿闍梨が弟子を曼荼羅に引入し、灌頂を与え、その後、悉地を得るための教えが説かれるのである。それは以下の如く、五つに分けて教示される。

1. 金剛秘密身印智, 2. 金剛秘密觀視印智, 3. 金剛秘密語印智,
4. 金剛秘密心印智, 5. 金剛秘密印智

以上の五種の印智を学び、弟子は、この悉地を得るための修行をすることによって、先に説かれた女尊と融合するのである。「四種視」は、その5つの教えの中、第2番目の「金剛秘密觀視印智」の中で説かれる。⁽³⁾

以下、「金剛秘密觀視印智」[堀内 1983：§365～370] の部分を提示してみる。

365 tato vajraguhyadr̥ṣṭimudrājñāṇaṃ śikṣayet //

366 vajradr̥ṣṭis tu saṃrāgaprahaṣṭotphullalocanā /

tayā nirikṣitā strī tu vaśyā bhavati śāśvati //

- 367 pradruta-pracalac-cakṣuḥpakṣmākaraṣaṇalocanā /
 diptadrṣṭir iti proktā sarvam ākarṣayeḥ jagat //
- 368 pradhvastabhṛkūṭibhaṅgakrodhasaṃkucitekṣaṇām /
 krodhadṛṣṭim samādhāya trailokyan api nāśayet //
- 369 merumandarapāṣāṇadrḍhānimiṣalocanā /
 maitrīdrṣṭir iti khyātā jvaragrahaviṣāpaheti //
- 370 athāsāṃ hr̥dayāni bhavanti //
 vajradṛṣṭi maṭ / diptadrṣṭyaṅkuṣi jaḥ //
 krodhadṛṣṭi hiḥ // dr̥ḍhadṛṣṭi traṭ //
- 365 次に、金剛秘密眼印智を学べし。
- 366 金剛視は、愛着によって歓喜され、大きく見開いた眼なり。
 それによって女性を眺めるならば、常に支配者となる。
- 367 素早く逃げ去るような、動揺する眼と睫毛は、鉤召眼なり。
 光明視なりと説かれ、あらゆる生類を鉤召すべし。
- 368 粉碎する眉をしかめることは、忿怒の目を細める視線である。
 忿怒眼で見据え、三界を摧滅すべし。
- 369 須弥山、曼陀羅山の瓦礫は、堅固にして瞬く眼をもつものは、
 慈愛の視点なりと、称される。苦痛、執着を解毒する。
- 370 さて、ここに心真言が存在する。
 金剛視よ マット、鉤召せる光明視よ ジャハ
 忿怒視よ ヒーヒ、堅固視よ トラット

次に四種視それぞれについて内容を検討してみる。

まず、「四種視」の「視」という言葉についてであるが、サンスクリットで *drṣṭi* と書かれ、また施護が「視」と訳しているように、「初会金剛

頂経」で説かれているものは、「眼」そのものを言っているわけではなく、どちらかといえば、「眼差し」と解釈するべきである。

これら「四種視」について、[Āloka] は以下のように説明する。

金剛視 (vajradṛṣṭi)

「愛着」とは、意楽することであり、そのことから、生起される歓喜こそが、あらゆる愛着によって歓喜されるのである。それによって眼は、大きく見開かれ、広く開けられた視線の印であるもの、それが愛着によるのであり、「歓喜によって眼が広げられた」と眼の印こそが金剛眼なのである。これと、vajra dṛṣṭhi maṭa と言われるものを、両眼に置き、金剛視線を生ぜしめ、それによって見るならば、女性たちは、確実になすがままになるだろう。この視線において、すべての愛着の思いと相応する、と世尊は説かれた。⁽⁴⁾

光明視 (diptadṛṣṭi)

「速やかに」等において大いなる歓喜によって速やかにということが、速やかなのであり、迅速にという言葉である。「激励する」ことによって、教令するのであって、どういうことかという、両眼であり、これによってまつ毛を引き寄せ、導くのであるならば、「速やかに眼を開く」眼のまつ毛を導くべし、と言われ、そのような視線であるもの、それについて説かれたのである。

視線もあり、光明もあるので、「光明を有する視線と説明される」とされることが示された。dipta-dṛṣṭha aṃkuṣa jah と言われ、両眼に置いて生起され、その導く諸所作に、光明の視線と相応するべきである。⁽⁵⁾

忿怒視 (krodhadṛṣṭi)

「粉碎」等であり、何によって粉碎する眉のしわをよせるのか。清浄

にすること、それが、しわを集めることである。その時、威厳のある怒りの眼によって見るのが、それが怒りの視線であるので、そこで「しかめた粉碎する眉をもつものは、怒りの眼こそ威厳がある」と説かれるのである。そのように怒りの様子をなし、等しく位置づけるならば、「三界もまた調御される」とされ、krodha-dr̥ṣṭhi hriḥ とされ、両眼に飾って、怒りのすべての皴によって怒りの覆いを生起すべし。⁽⁶⁾

慈愛視 (maitrīdr̥ṣṭi)

「須弥山」等の「須弥山」とは、山の王である。山もまた、それらである。「岩」とは金剛である。「そのように堅固なること」は、不壊である。目を閉じることが、動かないことであり、睫毛と眼が動かない視線の印であることが、須弥山の岩の如く堅固なので、微笑まない目が慈悲の視線であると説明され、dr̥dha dr̥ṣṭha traḥ といわれるものを両眼に位置づけ、堅固なる視線を生起し、その後、守護等に入る⁽⁷⁾のである。

以上、[Āloka] の解釈から見てみても、「初会金剛頂経」の「四種視」とは、行者の眼差しを示す。それは、それぞれの目の表情を作り、その眼差しの中に各真言を位置づけることによって、悉地をもたらしことができるとされる。また、その悉地の内容からするならば、四種法として具体的に表現しているわけではないが、それぞれの視線に四種法を配当することも可能と考えられる。

しかしながら、これらの四種の視線が個々の悉地のために別々に為されているのかと考えるならば、どうやらそうとも言えない。

[Āloka] は、上記の説明の後、この「秘密印智」の実践について次のように説明をする。

そこで視線の諸印によって、所作がなされる時、本尊瑜伽によって、これら本尊の諸印をひと月程観想すべきである。

ma 字から日輪，a を除いた ṭa 字から左目に月輪を。hūṃ 字から白色の金剛五鉤杵を両眼の瞳に思惟し，vajra dṛṣṭi maṭ と念誦し，説かれたとおりの特相の金剛眼を，vajra dṛṣṭi maṭ と念誦し，観想し，満月の終わりの夜中に為される。次に金剛眼が持てる敬愛の光明を発すべきである。

jaḥ 字より右目と左目に日輪と月輪を生起し，dipta dṛṣṭi añkuṣī jaḥ によって加持し，……月の終わりまで，同様に成就者は，説かれているような特徴を有する燃え上がるがごとき光明眼の鉤のごとき諸光明によって，成就すべきものを引き寄せる。

hiḥ 字によって，両眼に金剛日を思惟し，短い hūṃ 字から瞳に忿怒の金剛を思惟し，krodha dṛṣṭi hriḥ と念じて観想すべきである。次に同様に成就を為し，自身の眼より生起した忿怒金剛によって，成就すべき解脱を為す。

同様に本尊瑜伽を為し，衆生界において慈愛を発し，ma 字より右目に寂靜なる日輪を，a がない ṭa より，左目に月輪を思惟し，dṛḍha dṛṣṭi traṭ といわれる加持をなし，dṛḍha dṛṣṭi traṭ と念誦し，説かれたように⁽⁸⁾観想すべきである。

[Āloka] は，これらの四種視の修行は，本尊瑜伽を為すことが大前提であり，またその修行は，一ヶ月間ほど，四種の眼差しを一連の観法として実習すべきことが説かれている。

また，[Avatāra] においても，

これらの目もまたそれぞれの心真言を持って，自身の本尊瑜伽に住する瑜伽によって相応するならば，支配（敬愛）し，導き，縛し，伝

染病や諸毒を取り除くという、先に説かれた事業が為される。⁽⁹⁾

さらに、

この故に、すべての部族に共通するタントラが示され、大印の瑜伽こそ、自身の薩埵の三摩地によって、金剛語と視によって、最高の悉地⁽¹⁰⁾が速やかに得られる。

と説いているように、四種の眼差しが一つユニットとして考えられていることが伺える。

また、この秘密観視印智の悉地を成就するための、最初の眼差しである金剛視について [Avatāra] は、

金剛眼の愛着によって誰でも、歓喜せる愛着の眼である。それによって女性を見つめるならば、自在にすることが確実である。女性というのは、ここでは自身の本尊の大印である等を知るべきである。⁽¹¹⁾

としていることから、この四種の眼差しは、本尊の大印である女尊との融合をはかるためのヨーガとして考えられないだろうか。なぜなら、最初に説明したように、この「第二章金剛秘密曼荼羅」は陀羅尼としての女尊が曼荼羅として画かれ、梅尾祥雲氏が「自身の前の月輪中に観ずる此等の妃と合一することを修する」[梅尾1982：p.268]と説明し、また [Āloka] は、この「金剛秘密印智」で説かれるところの四種視の説明で

「次に」等において、「金剛秘密」とは、陀羅尼曼荼羅である。その印が薩埵金剛妃等である。その智慧が、確実であり、それを「学ぶ」と示されている。

「薩埵金剛を等しく入れる」とは、自身の心臓の月輪に五股金剛を観想することを得ることによって堅固にされるのであり、なぜならば、「自身によって自己の心臓は」と説かれている故に。このように示され、金剛界大曼荼羅より説かれた金剛薩埵の瑜伽を為し、その後、

陀羅尼曼荼羅より説かれた薩埵金剛妃を結び合わせて⁽¹²⁾
と陀羅尼曼荼羅において説かれた薩埵金剛妃と合一することが示されているからである。

3. まとめとして

これまでの金剛頂經の四種視についてまとめてみると、四種の視線は、確かにそれぞれの視線は敬愛、鉤召、調伏、息災の四種法との関連付けることができるが、それらの視線は、別々の悉地を求めるものではなく、[Avatāra] が「支配（敬愛）し、導き、縛し、伝染病や諸毒を取り除くという、先に説かれた事業が為される。」と説明しているところからも「女尊との融合をはかるための一つのまとまった瑜伽観法として説かれている。そして、最終的には、陀羅尼の女尊と合一することによって求める悉地は、最後の慈悲視で説かれるところの息災ではないかと考えられる。それは、[Kosala] が

一切の金剛を自身として観想するならば、「一切の金剛」と言われ、
仏と菩薩たちもまた慈愛の眼によって、その守護が為される。⁽¹³⁾
と説明するように、慈愛視を獲得することは、行者が本尊瑜伽を完成することによって仏菩薩と同様の眼差しを持つことであると考えられる。

つまり、四種視を一つのまとった観法とするならば、その修行は、最後の慈愛視の悉地を求めるものとみなすことができる。

資料

[Avatāra] Buddhaguhya, *rgyud kyi don la 'jug pa : Tantrārthāvatāra* Toh. No. 2501

[Kosala] Śākyamitra, *de kon na nyid bsdus pa'i rgya cher bshad ko sa la'*

irgyan : *Kosalālamkāratattvasaṃgrahaṭīkā*. Toh. No. 2503

[Āloka] Ānandagarbha, *de bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho nanyid bsdus pa theg pa chen po mngon par rtogs pa zhes bya ba'i rgyud kyi bshad pa de kho na nyid snang bar byed pa zhes bya ba : Sarvatathāgatatattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya nāma tantra tattvālokaḥ karī nāma vyākhyā*. Toh. No. 2510

[堀内 1983] 堀内寛仁遍著『梵藏漢対照 初會金剛頂經の研究 梵本校訂篇』密教文化研究所 昭和五十八年

[梅尾 1982] 梅尾祥雲『曼荼羅の研究』梅尾祥雲全集 第四集 臨川書店 昭和五十七年二月

[八田 1981] 八田幸雄『五部心観の研究』宝蔵館 昭和五十六年四月

[乾 1993] 乾仁志『金剛界曼荼羅の三昧耶会について』密教図像第12号 平成五年十二月

註

- (1) この他に、四種眼という固有名称は出てこないが、四種眼の図像表現が『五部心観』[八田 1981 : p. 34] に表されている。
- (2) [乾 1993 : p. 17] によれば、女性形で描かれる曼荼羅の作例として『五部心観』ラダックのアルチ寺三層塔内の曼荼羅が挙げられている。
- (3) 「第二秘密曼荼羅」の内容については、[梅尾 1927 : pp. 263-270] を参照。
- (4) chags pa ni mngon par 'dod pa ste / de las byung ba'i rab tu dga' ba ni kun du chags pas rab tu dga' ba'i yid do // des mig rab tu bgrad cing gdangs pa'i lta ba'i phyag rgya gang yin pa de ni chags pas te / dga' bas mig ni rab tu bgrad // ces bya ba lta ba'i phyag rgya ni rdo rje'i lta ba'o // 'di dang ba dzra dri ṣṭi ma ṭa zhes bya ba mig gnyis su bkod la / rdo rje'i lta ba bskyed de / des bltas na bud med rnams nges par dbang du 'gyur ro // lta ba 'di la sgeg pa'i nyams thams cad sbyar bar bya'o zhes bcom ldan 'das kyis gsungs so // [D : 182a1-3]
- (5) rab tu myur bar zhs bya ba la sogs pa la rab tu dga' bas myur ba ni rab tu myur ba ste / rings par zhes bya ba'i tha tshig go / rab tu bsgul bas na rab tu bskul te / de gang zhe na mig gnyis te / 'dis mig gi rdzi ma dgug cing 'dren par byed pa yin pas na / rab tu myur bar mig rab bskul / mig gi rdzi ma 'gugs byes pa'i // zhes bya ste de lta bu'i lta ba gang yod pa de la de skad ces bya'o / lta ba yang yin la gzi can yang yin pas na lta ba gzi can te gzi brjid can no // yin par bshad ces bya ba ni bstan pa'o // d'i

- pta dri ṣṭa aṃ gu sha dza : zhes bya ba mig gnyis su bkod la bskyed de
'gugs pa'i las rnams la 'bar ba'i lta bas sbyar bar bya'o // [D: 182a3-4]
- (6) khro gnyer zhes bya ba la sogs pa la / gang gyis khro gnyer gyi gnyer
ma 'dus shing / gsal ba gang yin pa de ni gnyer ma rab tu bsdus pa'o //
de nas khro ba'i mig btshums pas lta ba gang yin pa de ni khro bo'i lta ba
yin pas de la // khro gnyer gnyer ma rab bsdus pa // khro ba'i mig ni
btsums pa ste // zhes bya'o // de lta bu'i khro bo'i lta ba byas shing
mnyam par bzhag na ni / khams gsum yang ni 'jigs par byed // ces bya
ba ste / kro dha dri ṣṭi hri zhes bya bamig gnyis su bkod la / khro bo'i
nyams thams cad kyis khro bo'i la ba bskyed par bya'o // [D: 182a6-b1]
- (7) ri rab ces bya ba la sogs pa ri rab ni ri'i rgyal po'o //ri yang de dag
go // brag ni rdo rje'o // de dang 'dra bar brtan pa ni mi phyed pa'o //
'dzum pa med pa ni mi g-yo ba ste / rdzi ma dang mig mi 'gyur pa'i lta ba'i
phyag rgya gang yin pa de ni / ri rab ri'i brag ca 'dra bar brtan pas 'dzum
pa med pa'i mig byams pa'i lta ba yin par bshad ces bya ste / dri dha
driṣṭa traṭ zhes bya bas mig gnyis su bkod la / brtan pa'i lta ba bskyed
nas / de'i 'og tu bsrung ba la sogs pa'i 'jug par bya'o // de la gang gi tshe
lta ba'i phyag rgya rnams kyis las byed pa de'i tshe / rang gi lha'i sbyor
bas lha ba'i phyag rgya 'di dag zla ba gcig tsam gyi bar du goms par
bya'o // [D:182b1-3]
- (8) de la gang gi tshe lta ba'i phyag rgya rnams kyis las byed pa de'i tshe /
rang gi lha'i sbyor bas lha ba'i phyag rgya 'di dag zla ba gcig tsam gyi bar
du goms par bya'o // de la re zhig yi ge ma las nyi ma'i dkyil 'khor ṭa
a med pa las mig g-yon pa zla ba'i dkyil 'khor / yi ge h'uṃ las rdo rje rtse
lnga pa dkar po mig gnyis kyi mig gi 'bras bur bsams la ba dzra dri ṣṭi ma
ta zhes bya bas phyin gyis brlabs la / ji skad du gsungs pa'i mtshan nyid
can gyi rdo rje lta ba / ba dzra dri ṣṭi ma ta zhes zlos shing bsgoms la /
zlo shing bsgoms la / zla ba tshang ba'i mthar ni mtshan thog thag
bya'o // de nas dbang du byas la rdo rje lta ba dang bcas pa'i 'od zer
rnams spro bar bya'o // de bzhin du rang gi lha'i rnal 'byor byas la yi ge
dza las mig g-yas dang g-yon du nyi ma dang zla ba bskyed la / d'i pta dri
ṣṭi aṃ gu sha dza : zhes bya bas byin gyis brlabs te / rdo rje lcags kyu lta
bu'i 'od zer rnams spro ba dang / d'i pta dri ṣṭi aṃ gu sh dza : zhes zlos
shing bsgom par bya'o // de nas zla ba'i mthar de bzhin du bsgrubs pas
ji skad du bshad pa'i mtshan nyid can gyi 'bar ba'i lta ba'i lcags kyu lta

bu'i 'od zer rnams kyis bsgrub par bya ba dgug par bya'o // de bzhin du rang gi lha'i rnal 'byor byas la / yi ge hi zhes bya bas mig gnyis su rdo rje nyi ma bsam / yi ge h'uṃ thung ngu las mig 'bras khro bo'i rdo rje bsams la kro dha dri ṣṭi hri zhes bya bas byin gyis brlabs nas / ji skad bshad pa'i mtshan nyid can gyi khro bo'i lta ba dang / kro dha dri ṣṭi hri zhes zlos shing bsgom par bya'o // rang gi mig las byung ba'i khro bo'i rdo rje rnams kyis bsgrub par bya ba thal bar bya'o // de bzhin du rang gi lha'i rnal 'byor byas la / sems can gyi khams rnams su byams pa sros te / yi ge ma las mig g-yas par nyi ma'i dkyil 'khor zhi ba / ṭa a med pa las mig g-yon par zla ba'i dkyil 'khor bsams la dri dha dri ṣṭi tra ṭa zhes bya bas byin gyis brlabs nas / dri dha dri ṣṭi tra ṭa zhes zlos shing ji skad du bshad pa'i lta ba bsgom par bya'o // [D : 182b3-183a3]

- (9) lta ba 'di rnams kyang so so'i snying po gang yin pa dang ldan par rang gi lha'i rnal 'byor du gnas pa'i rnal 'byor pas sbyar na dbang du bya ba dang / dgug pa dang / gzbug pa dang / rims nad dang gdon la sogs pa sel ba'i las sngar gsungs pa'i rnams byed do // [D : 58a6-7]
- (10) de'i phyir rigs thams cad spyi'i rgyud bstan pa nas / phyag rgya chen po'i sbyor ba ni, rng gi sems dpa'i ting 'dzin gyis / rdo rje tshig dang lta ba yis // dngos grub mchog ni myur du 'thob // [D : 58b7]
- (11) rdo rje lta ba'I chags pas su, rab tu dga' ba chags pa'i mig de yis bud med la bltas na // dbang du 'gyur bas nges pa'o // bud med ces bya ba ni 'dir rang gi lha'I phyag rgya chen po la sogs par shes par bya'o [D : 58a 4-5]
- (12) de nas zhes bya ba la sogs pa la rdo rje gsang ba ni gzungs kyi dkyil 'khor ro // de'i phyag rgya ni sems ma rdo rje ma la sogs pa'o // de'i ye shes ni nges pa ste / de bslab po zhes pa ni nye bar bstan pa'o // sems dpa'i rdo rje mnyam gzhaḡ la / zhes bya ba ni rang gi snying ga'i zla ba'i dkyil 'khor du rdo rje rtse lnga pa bsgoms pa'i stobs kyis brtan par bya ba ste / gang gi phyir / bdag gis bdag gi snying gar ni / zhes gsungs pa'i phyir ro // 'di skad ston pa yin te / rdo rje dbyings kyi dkyil 'khor chen po las gsungs pa'i rdo rje sems dpa'i rnal 'byor byas la / de'i 'og tu gzungs kyi dkyil 'khor las gsungs pa'i sems dpa' rdo rje ma bcings te / [D : 184 b7-185a3]
- (13) rdo rje thams cad bdag nyid du bsgoms na rdo rje thams cad ces bya ba / sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnams kyang byams pa'I lta

bas de srung bar mdzad pa'o // [D : 144a5]

(補1) 大正大学総合仏教研究所の密教聖典研究会で指導されている伊藤亮貫氏にお願いして、サンスクリット写本，ならびにチベット語訳の当該箇所について確認し，指摘していただきました。